

「地球研言語記述論集」第7号

序文

千田俊太郎

言語記述研究会、略称「記述研」は2014年度も定期的に例会を開き、活潑な研究交流の場となった。四月には遠方に移って例会にいつも参加することが難しくなった仲間もあるが、一方で新たな面々も加はってくれてゐる。英語による企画、発表もあつた。気軽な研究交流をといふ趣旨で海外学会報告など、新しいスタイルの発表も出てきてゐる。

論集本号も多く原稿を寄せてもらつた。お蔭でなかなかのページ数に達してゐる。いつも通り論文、言語資料があるほか、エッセイを含んでゐる。全體に、一般化の難しい現象を扱つたものや、變はりゆく文化の貴重な記録になつてゐるものが多い。中には記述研例会での発表が出発点になつて論文になつたものもある。記述研のウェブページの例会記録で論文の生ひ立ちを確認することができる。

伊藤さんは「ムラブリ語の数詞」で数詞の數量句用法と非數量句用法の兩方にわたる記述をしてゐる。個々の数詞の特異な用法について丁寧に観察してゐる。固有数詞があまり大きな数までないこと、数詞が借用語に侵されやすいこと、貨幣經濟の導入との關連など、パプア諸語の狀況とも印象の重なるところも多い。

植田さんの「モンゴル語ハルハ方言の借用語における接尾辭の母音調和」は、非常に複雑な、複数の要因が關聯する現象を扱つてゐる。音聲の新しいデータを得て、先行研究に言はれた接尾辭の母音調和とアクセントとの關係は、決定的なものではないことを示した。話者による差よりも語による差が大きく、特に語幹末に i, e を持つ場合の振る舞ひが難しい。

落合さんの「セデック語パラソ方言の談話資料「ソメコ」と終助詞の用法」は、要を得た文法概略、談話資料、談話資料に基づく終助詞研究の三本の柱からなる力作である。談話の内容は、すでに繼承が途絶えた習慣をテーマにしてゐる點が貴重である。終助詞研究も自然發話だからこそ可能な研究分野であり、氣の利いた組み合わせである。

倉部さんの「ジンポー語のテキスト資料「落雷」」は、言語資料であるとともに、貴重な文化的記録でもある。倉部さんの記述から、テキストの内容は100年以上前の習慣の口傳であると考へられるが、行動様式の描寫は非常に具體的である。ジンポー語の直譯調による翻譯の試みもとても面白く、ある種の文學的な味はひさへある。

白田さんの「奄美喜界島志戸桶方言の談話資料」は前号でも扱つた複数の話し手のやり取りの記録である。今度は前号とは別の方言の、四つの談話を取り上げてをり、かなりの分量を書き起こしてゐる。四つのうち一つは歌であり、日常會話には見られない語形の使用例が報告されてゐる。話者の方言使用に關する經驗や認識を話題にしてゐる談話など、興味深く讀んだ。

鈴木さんは共著論文と単著論文の二本を寄せられた。共著論文は物語の譯注で、同じ物語の別のバージョンや言語に関する情報が豊富に示されてゐる。単著論文は彼の眞骨頂ともいへる前氣音関連の論文である。前鼻音の調音は「必ずしも調音器官の閉鎖を必要としない」。人間言語の音聲の多様さについて、目を瞠らされる。

野島さんの「ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis」は、明らかに長年の調査の結果によるものである。問題の小詞は基本的には「疑問詞疑問文であることを標示する」。その小詞に関する記述内容は、短い3節に凝縮されてゐるが、文法概説に示された事実との関係や先行研究との違ひを踏まへて讀むと、濃密である。

林さんの「ロロ・ポ語音論の予備的研究」は、先行研究が非常に少ない言語について、二つの媒介言語を駆使して調査を行ひ、音聲の觀察と音素分析といふ言語記述の最も基礎的な作業を行つた結果である。音聲的に非常に近い二つの低母音が對立することなど、興味深い。充實した付録の資料編は本論集ならではである。

吉岡さんの「北パキスタン諸言語のコピュラ」は、複数の言語、方言の現地調査に基いて、地理・系統の兩方の觀點から考察してゆくもので、背後にたいへんな作業量があつたことが明らかである。ブルシャスキー語の前身が言語特徴の傳播の源だつたとしたら、その言語の話者集團は昔の當地の社會において重要な位置を占めてゐたのだらうか。楽しい想像がふくらむ。

最後は長田さんのエッセイ「庄垣内さんの思い出」である。若い日々の感受性、一見ぎよつとするやうな表現やエピソード、さまざまな思ひが重ね合はさり、抱腹絶倒の後に、故人を悼む氣持ちは熱く傳はつてくる。

以上、魅力的なラインナップ、今號もお楽しみいただきたい。

乙未年某月某日
千田俊太郎